

# ハタケシメジの人工栽培を目指して

水谷和人

## ハタケシメジとは？



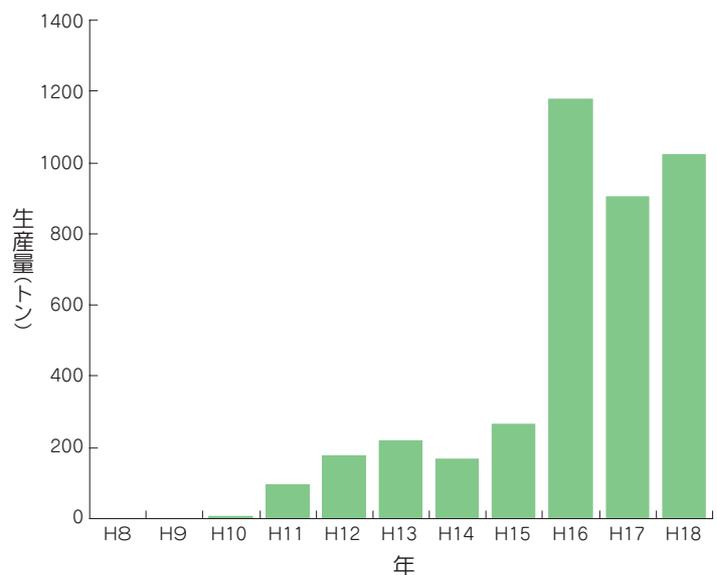
●野生のハタケシメジ

ハタケシメジはその名前からもわかるように、山の中よりも畑や道端、庭先などで主に株状になって地面から発生します。土中に埋まった木材などを栄養として生活していると考えられています。発生時期は主に10月ですが、梅雨の6月頃に発生することもあります。私たちの身近な所で発生している割にはあまり知られておらず、キノコ狩りの対象にもほとんどなっていません。しかし、美味しいキノコで、姿・形は「香りマツタケ、味シメジ」と言われる秋の味覚、ホンシメジに非常によく似ています。このため、市場性の高い食用キノコとして期待されています。

## 栽培の現状

ハタケシメジは、最近では人工栽培が行われ、スーパーマーケットなどでも販売され始めています。

平成18年のハタケシメジの全国生産量は1,023トンです。キノコの中で一番たくさん作られているのはエノキタケで、その生産量は114,630トンですから、ハタケシメジの生産量がまだ非常に少ないことがわかります。岐阜県でも過去に栽培が行われた実績がありますが、現在は行われていません。美味しいキノコであるにもかかわらずに生産量が少ないのは、栽培の難しさが大きな原因と考えられます。



●ハタケシメジ生産量の推移（全国）

特用林産関連資料（林野庁経営課特用林産対策室、H8～H18）より作成

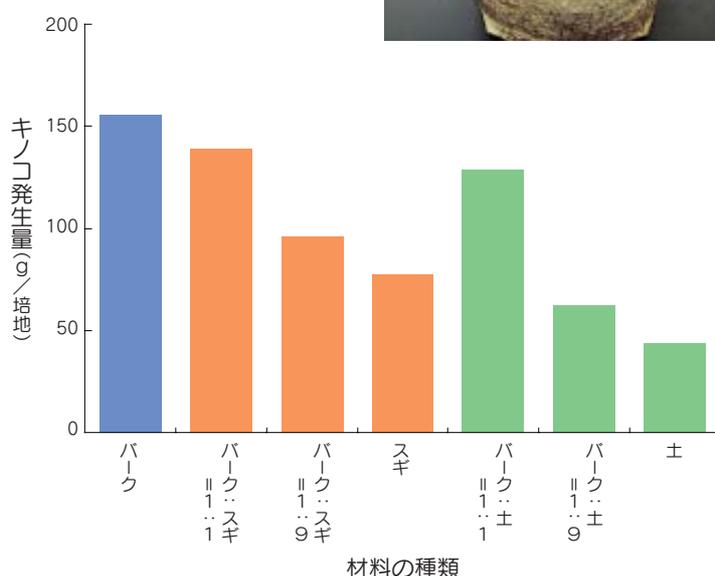


## 🌲 バーク堆肥がお好き

ハタケシメジの施設栽培\*で、栽培に適する培地の種類を検討しました。

バーク堆肥、スギオガ屑、赤玉土に栄養を混ぜて比較すると、キノコの発生量が多いのはバーク堆肥でした。バーク堆肥に混ぜるスギオガ屑や赤玉土の量が増えると、発生量は減少しました。スギオガ屑だけでもキノコは発生しますが、バーク堆肥だけに比較すると半分程度と少なくなります。キノコの施設栽培では一般にオガ屑が利用されますが、ハタケシメジは、バーク堆肥がお好きなようです。

バーク堆肥、スギオガ屑、赤玉土に栄養を混ぜて袋に詰め、ハタケシメジの施設栽培を行いました。



● 培地の種類とハタケシメジの発生量

培地の容量は約1Lで、重さは培地の種類によって異なる(600~949g)

\*キノコの施設栽培は、オガ屑と速効性の栄養となる米ぬかやフスマなどを混合してビンや袋に入れ(培地)、温度や湿度を管理しながら菌糸を増殖させてキノコを発生させます。

## 🌲 これからの課題

ハタケシメジの栽培が難しい理由には次のことが挙げられます。

- 1 菌糸の成長が遅く、雑菌汚染に弱い。
- 2 バーク堆肥は、攪拌したり容器への詰め込みが困難なこと、殺菌不良を生じやすいなどの問題があり、キノコの施設栽培において扱いにくい材料である。
- 3 キノコの発生を安定させるために覆土という工程が必要な場合が多く、作業が繁雑である。

ハタケシメジの増産を図るためには、これらの課題を解決する必要があります。栽培しやすい種菌の開発、バーク堆肥に替わる材料の探索や覆土工程の省略などの生産技術の改良が求められています。当研究所でも、これらの研究開発を進め、新たな岐阜ブランドを目指してキノコ生産者に新しい技術を提供していきます。